

## エミリアノ・サパタ

1879年8月8日、エミリアノ・サパタは土地問題を抱えたアネネクイルコ村に、十人兄弟の九人目として生まれた。兄弟のうち男二人と女二人だけが成人した。エミリアノの少年時代のことは、彼の胸に桜色の小さな手の形をした痣があったこと、アネネクイルコの小学校で学び、初歩の簿記を習ったということ意外は殆ど知られていない。十六才で両親をなくした時には既にしっかりと独立していたエミリアノは、十頭のラバを追い、農場から町へトウモロコシを、時には近くのアシエンダへ建設用の石灰やレンガを運んだ。ラバ追いの仕事に加えて、彼は農作業にも精を出した。エミリアノ・サパタは馬術に優れ、騎手として闘牛にも出場し、馬の調教師としてアシエンダでも雇われた。彼は次第に見聞を深め、アネネクイルコでは生き字引と言われるようになった。1902年から三年の間に発生した隣村ヤウテペックとアトゥリウアヤン・アシエンダの紛争に密かに関与した。

71

1906年、サパタにとって画期的な出来事があった。二人の教師がアネネクイルコに着任した。最初のパブロ・トレス・ブルゴスは読書家で自由主義新聞「ディアリオ・デル・オガール」や無政府主義機関紙「リヘネラシオン」を購読していた。サパタはそれらを読んだ。暫くしてやって来たオティリオ・モンターニョはロシアの無政府主義者クロボトキンの信奉者で、サパタはモンターニョの講義に熱心に耳を傾けた。サパタが革命の原理を学び、次第に政治への関心を深めている頃、モレロスのアシエンダは喰うか食われるかの試練に立たされていた。競争相手は国内のサトウキビ生産者と国外のテンサイ栽培者であった。二十世紀に入りアメリカ資本が投入され、太平洋岸諸州やプエブラ＝ベラクルースでは生産性が30%も上がり、ソノラではテンサイが栽培され、国内市場は飽和状態であった。モレロスのアシエンダ経営者は技術革新の資金がなく、代わりに村民に圧迫を加えるようになった。<sup>72</sup>

1908年、エミリアノはクアウトウラの女性イネス・アルファロを誘拐結婚した。これは当時のモレロスでも行き過ぎた行為で、かなりのセンセーションを巻き起こした。イネスの父親は激しく反対し、当局に訴えたため、エミリアノは罰として陸軍第七大隊に入隊させられることになった。しかし彼は何らかの手を使って直ぐに退役し、翌年二月の知事選挙では野党候補を精力的に応援した。3月15日、ディアスの押すアシエンダの所有者パブロ・エスカンドンが知事に就任した。新知事は明らかに村人を虐待する政策をとり、アシエンダはおおびらに土地の収奪を開始した。翌年6月、アシエンダ・オスピタルの管理人は村人に土地の貸与を中断すると告げた。九月、エミリアノ・サパタは古文書を調べ上げ、弁護士の助けを借りて、撤回を求めた。それに対して管理人は、「もしアネネクイルコの村人が種を撒こうと思うなら、花瓶の中に播け、お前らの土地はない、荒地の山の斜面さえも与えない」と言い切った。<sup>73</sup>

翌年四月、村人はモレロス州知事に、五月には最後の手段としてポルフィリオ・ディア

スに手紙を書いた。ディアスは、本件をモレロス州知事あてに回した、との返事をした。州知事は村人の代表と会い、アシエンダの措置により被害を蒙る者の名簿を求め、村人はそれを二日後に提出した。サパタは危機的状況を感じ、自ら先頭にたち何世紀もの間争われてきた土地を占有し分配した。その直後ディアスはアシエンダの相続人に対して正式に土地を返却する事を通告した。1910年12月、サパタは石垣を取り壊し、オスピタルの土地を分配した。副王の約束は三世紀の後にやっと叶えられた。74

1910年半ば、アネネクイルコでサパタが起した反乱、三百年前に奪われた土地を取り返す小さな革命は、マデロ旋風が吹き荒れなければ、歴史の表舞台に登場することはなかったと思われる。しかし、アシエンダに取り上げられた土地の返却を村人に約束するマデロのサン・ルイス・ポトシ計画は、サパタをはじめトレス・ブルゴスやモンターニョにとって、天から聞こえる音楽のようであった。革命が始まったとき、アネネクイルコの人たちはパブロ・トレス・ブルゴスをサンアントニオにいるマデロに代表として送り込んだ。彼がサンアントニオに向かったのは十二月半ば、運良くマデロと会見し、直接マデロから特命を受けた。トレス・ブルゴスがサンアントニオから帰ったのは、マデロが再びメキシコに入った1911年2月であった。サパタはマデロが農業問題に真摯に取り組んでいる事を知った。トレス・ブルゴスがモレロス州革命軍の主導者となり、約三週間かけて同盟者を集めた。三月十一日夜、サパタ、トレス・ブルゴス、エミリアノの従弟ラファエル・メリノはアヤラ村で決起した。村の警官から銃を取り上げ、村人を広場に集め、トレス・ブルゴスはサン・ルイス・ポトシ計画を読み上げた。モレロス州でマデロ革命が始まった。翌日反乱軍は近在の村やアシエンダで人や馬を集め、州境を越えてプエブラに入り、次の作戦を練った。75

3月22日、パブロ・エスカンドン知事はメキシコ市からの強力な要請で、州都クエルナバカ駐屯の騎馬歩哨隊とルラーレを伴って、州南部にあるホフトゥラ防衛に赴いた。二日後トレス・ブルゴスはその北六マイルのトゥラキルテナンゴに進出した。その話を聴いたエスカンドンは、叛徒が自分を誘拐に来たものと思い込み、兵隊、警官、地方政府首脳を引き連れて州都へ逃げ帰った。難なくホフトゥラに入ったトレス・ブルゴスの配下にはトゥラキルテナンゴ出身の指導者の一人ガブリエル・テペパの率いる一団がいた。彼等はトレス・ブルゴスの命に背いて掠奪の限りを尽くした。トレス・ブルゴスは会議を招集し、サパタとメリノの参加を求め、その会議で辞表を提出した。辞表後、彼は二人の息子と共に徒歩でアヤラに向かったが、途中運悪くパトロール中の連邦警察に見付き、その場で親子は射殺された。指導者を失ったモレロス革命軍は再びプエブラに避難し、サパタを革命軍南部地区最高指揮官に選出した。76

5月初め、政府軍要塞はクエルナバカとクアウトゥラの僅か二箇所になっていた。クアウトゥラは有名な騎兵第五ゴールデン連隊によって守られていた。サパタは降伏を求めたが、市長は拒んだ。戦いは六日に及び、最後は肉弾戦となった。5月19日、政府軍はク

エルナバカへ撤退した。このときウエルタは六百の兵を伴いクエルナバカに来ていたが、クアウトゥラへ援軍を送らなかった。南軍兵士の勇敢さをよく知っていたディアスは、サパタ軍蜂起により浮き足立ち、戦闘終了の六日後辞職した。77

6月7日、サパタはフランシスコ・マデロと会見し、マデロと後味の悪い昼食を共にした。マデロはサパタに対して示したのと同じような寛容さで農園主に接した。農園主はサパタ軍の残忍さをことさら吹聴した。マデロが何故彼らに耳を傾けるのか、サパタには理解できなかった。メキシコ市の新聞は、盗賊サパタは何時暴動を起すかわからないと、警告した。6月21日、サパタはマデロの自宅に招待された。緊張した雰囲気やを和らげようとサパタはマデロにゆっくりと近づき、マデロがチョッキの上に架けていたゴールド・チェーンを指差して言った。「ところでセニョール・マデロ、私が武器を持っていることを理由に、その時計を取り上げたとしましょう。暫くして偶々二人が逢った時に、もし、お互いが同じような武器を携えていたとしましょう。貴方は私に時計を返せと言う権利がありますか」これに対してマデロは「当然です、その上に私は貴方に賠償をもとめます」と応えた。そしてサパタは言った「まさしく、それと同じ事がモレロス州で起こったのです。アシエンダが村人の土地を取り上げたのです。私の兵士たちから貴方に伝えて欲しいと言われてきました。速やかに土地が戻るようにしてください」78

サパタはマデロを信頼していたが、ディアスの遺物である暫定政府のデ・ラ・バッラ大統領はサパタに解隊を迫った。サパタの熱心な要請に応え、マデロはモレロスを訪ねた。マデロは彼が愚かにも残したディアス政府とサパタを、誠心誠意説得することで問題を解決しようと考えていた。マデロは到着するなり演説し、サパタのことを「最も榮譽ある紳士」と褒め称えた。しかし、マデロもサパタもアシエンダ、首都の新聞、人種差別主義のデ・ラ・バッラ大統領、熱狂的なビクトリアノ・ウエルタの連合軍の前では、なす術もなかった。ウエルタはサパタ軍を壊滅させ、サパタを木に吊るすと豪語してヤウテペックに向かっていた。モレロスに来てから四日目にしてようやく、マデロは中央政府がサパタのことなど一顧もしていない事に気付き、自分が大統領に成ったら約束を果たすとサパタに言い残して帰った。79

レオン・デ・ラ・バッラはマデロと農民革命の指導者エミリアノ・サパタの間を引き裂くことに大いに貢献した。サパタはマデロがサン・ルイス・ポトシ計画で約束した事を実行し、失った土地を農民へ返却する事を期待していた。暫くしてマデロはクエルナバカとクアウトゥラへ出かけ、サパタと面会した。マデロは熱烈な歓迎を受け、サパタに引き続き自分を信じるよう促し、サパタもマデロに忠誠を誓った。しかし、この両者の合意は、ポルフィリオ時代に戻りたいと願っている者にとっては危険極まりないものであった。大地主、そしてサパタのいるモレロス州知事などはレオン・デラ・バッラにしきりに嘆願した。議会や新聞も大騒ぎをした。しかし、サパタより危険なのはモレロス駐屯連邦軍司令官ビクトリアノ・ウエルタであった。ウエルタはクエルナバカから無断でユカテペックへ

軍を進め、白旗を振る市会議長に向かって発砲した。デ・ラ・パツラは8月20日、マデロあてにメッセージを送り、サパタが二十四時間以内に武装解除すればウエルタを引き上げると言った。マデロはモレロスから執拗にウエルタの引き上げを要求したが、白人大統領デ・ラ・パツラはサパタのような類の者とは直接交渉はしない、と動かなかつた。マデロは自分が大統領に成ったら、必ず約束を迫ると言い残してモレロスをあとにした。こうしてマデロはサパタを二度欺いた。80

1911年11月6日、マデロが大統領になって、両者は最後の努力をした。サパタは実に理に叶った要求をした。連邦軍のジェネラルをラウル・マデロに換えること、土地の問題についてそれとなく触れ、農業関連法案を成立させ、農民の暮らしを楽にする事であった。これに対して、マデロは次のように言った。「私の政府は、君ら叛乱者のため大いに迷惑を蒙っている故、国外に消えて欲しい」、マデロはあとで、この発言を後悔した。サパタに残ったものは怒りのみであった。サパタが大統領にあてた最後の手紙は、「その日が来るのを指折り数えて待っていてください。ひと月のうちに二万の兵を連れメキシコ市に上がり、チャプルテペックに参上するのを楽しみにしています。そして、貴方を森の中の一番高い木に吊るす所存です。」サパタとの間は完全に決裂した。暫定政府の置かれた、何とも曖昧な四ヶ月間のうちにマデロの政治的威信は失墜した。マデロは勝利に対する報酬を自ら返上し、革命の基盤を自らの手で危うくした。憲法に抵触しないことのみをこだわり、結果として何も得られなかったのみか、革命に参画したほとんどの者は彼に反対し、混乱し、幻滅を感じ、そして欺いた。大統領に就任するまでに、敵と味方の目の前でマデロは失敗を重ねていった。サパタとの決裂は革命最大の悲劇であったと、マデロは死の迫った数時間前、後年パンチョ・ビヤの参謀となる連邦軍ジェネラル・フェリペ・アンヘレスに語った。恐らくその時には、何世紀も待ちわびていたサパタの態度や行動を、十二分に理解できていたはずである。サパタは口癖のように言った。「殺しや盗みは許せる。何故なら、それには何らかの理由があるからだ。しかし、裏切りは絶対に許せない」81

1911年11月25日、サパタとオティリオ・モンターニャは小さな山村アヨスストゥラでアヤラ計画に署名をした。この中でサパタはマデロを裏切り者と激しく非難し、自らの革命の理想を掲げた。サパタは言った。「私は先祖と共にこれまで、政府に我々の土地の返却を、法律の枠内で平和裏に求めてきた。しかし、彼等は我々を無視し、正義はなされなかった。ある者は逃亡を企てたとして撃たれ、ある者はユカタンやキンタナ・ローに送られ二度と帰ることがなかった、ある者は自分のように、憎むべき徴兵制度により軍隊に強制徴用された。他に手段がないが故に、今我々は武器を手にして自らの権利を主張している。独裁者に社会正義を請うときは両手で帽子を持たず、武器を持って。」

アヤラ計画第一の目的は、マデロが始めた栄光ある革命を再び継続することであった。計画には三つの主題が掲げられていた。先ず、アシエンダ、シエンティフィコ、カシーケ(地方の政治ボス)によって横領された土地、山林、水を、証文を持つ村人に返却する事。次に、

これらの所有者により独占されてきた土地、山林、水の三分の一を収用し、これを村人、市民に提供して有効利用と改良を行い、国民の活性化を行う。最後に、これらのプログラムに直接、間接に反対する者の土地、山林、水を全て国有化し、もし賛成していたら彼らのものであるはずの三分の二の財産を取り上げ、このプログラムのために戦って斃れた者の寡婦と孤児への補償と恩金に供する、であった。サパタのプログラムは急進的ではなく、アヤラ計画はアシエンダの消滅が目的ではなかった。アシエンダは法律に違反して手に入れたものを村人に返し、理に叶った範囲で土地を減らすよう求められた。アヤラ計画は革命の最終目標を示すサパティスタのバイブルであった。<sup>82</sup>

当初サパティスタの叛乱は組織だっていなかったが、連邦軍と交戦するうちに形が出来、強力になっていった。双方に過激な隊長がいた。政府軍ジェネラル・フベンシオ・ロブレスは村を焼き払い、住民を強制移住させた。サパティスタ南部の指揮官ヘノベボ・デ・ラ・オーは満員の列車を爆破した。マデロ政府は戦術転換をはかり、新しく作戦本部司令官に任命されたフェリペ・アンヘレスは、列車へのダイナマイト攻撃にも関わらず、残忍なロブレスを退け、戦争の拡大を食い止めた。彼はサパティスタの行動は正当性があると考えていた。主要な町では選挙が行われ、徐々に農地改革への気運が高まっていった。サパティスタ運動は弱まり、十分な武器や物資が得られず、サパタは兵士をプエブラ州アカトゥランに撤退させた。<sup>83</sup>

71. Frank McLynn, "Villa and Zapata, A History of Mexican Revolution", Carroll & Graff Publishers, 2000, P41
72. Ibid. P43
73. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P177
74. Ibid. P278
75. John Womack, Jr., "Zapata and the Mexican Revolution", Vintage Books, 1968, P75
76. Ibid. P78
77. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P285
78. Ibid. P286
79. Ibid. P286
80. Ibid. P262
81. Ibid. P287
82. Ibid. P288
83. Ibid. P289

[目次へ戻る](#)